

## 第5回海外ネットワークに関する万国津梁会議 議事概要

日 時：令和3年8月3日（火）13:00～14:50

場 所：沖縄県庁6階第2特別会議室

出席者：小川寿美子委員（委員長）、新垣誠委員（副委員長）、安里三奈美委員\*、  
新垣句子委員、新垣秀彦委員、佐野景子委員\*（\*オンライン参加）

### 事務局からの説明

（東江二男 沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課主幹）

提言内容（資料3）について、前回会議からの主な変更内容を説明（資料3の下線部分を参照）

### 議 事

（小川委員長）

前回5月25日にこの会議が開催された際に、意見交換が活発に行われ、その中でここが足りない、ここは修正した方がいいという意見を伝えてもらい、そして宿題として委員の皆さんに持ち帰っていただいて、全ての意見を盛り込んだ原稿が今回のお手元にある資料3の提言書（案）となっている。その意味で、各委員の満足度の高い形で仕上がっている。

これから内容を精査していく。まずは名称の変更から。前回までは「最終報告書」という名称だったが、今回から「提言書」とした。この経緯について事務局に説明をお願いしたい。

（東江二男 沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課主幹）

資料3は、前回は「最終報告書」という名称であったが、事務局が委員長の意見も確認して、最終という名称は次回にまたウチナーンチュ大会に関する議論もあるので、最終という言葉は対外的にも誤解を与えるので、削除した。

また、報告書という名称も今回の会議の意見を知事本人に提言として、また、そのあと政策に反映していくことも見据えて、より適切な「提言書」という名称に変えようかと

事務局で話し、委員長にも相談して、今回、資料3を「提言書」へと名称変更した。

(小川委員長)

知事への提言書、手交予定は10月19日と伺っている。今回の会議はその10月19日に向けての内容の最終確認という形になる。では、議事に移る。

会議冒頭で、事務局から大きな訂正又は追加について説明があったが、ここでは細かい指摘などを拾い、全委員共通で理解された文書になっているかを確認していきたい。では、意見のある委員からどうぞ。

(佐野委員)

アンケート調査の基本情報をどこかに加えておいた方がよい。脚注よりは資料篇で、アンケートの件名、実施期間、対象者などを記載するとよい。

(小川委員長)

23ページの資料編2の冒頭に、実施期間、対象団体数などの情報を追加したい。

(新垣秀彦委員)

構成的なことだが、Ⅲは四つの課題にかかる検討考察とあるが、基本的にはここは提言になる。検討考察を踏まえた「提言」とか、検討考察からの「提言」とか、このⅢに提言という言葉を入れた方がいいのではないかというのが一点。

そしてⅢは提案という表現が使われているが、「提案」なのか「提言」なのか、それともそこはそれぞれ意味があるのかということが二点目。

そして三点目だが、提言の鳥瞰図が資料編に入っているが、これを我々の提言のスキームズ・骨子にして本編に入れてはどうか。知事への提言後、これだけの文量を県民、関係団体、海外のウチナーンチュが見る時に、全部は読まないけど、この鳥瞰図をみれば骨子がわかる。広報にも貢献する。鳥瞰図は資料ではなく、本編に入れた方がよいと思う。以上3点。

(小川委員長)

まず私の意見だが、19ページの囲みの下に「Ⅲ-5」全課題に共通する提言が書かれて

いるが、そこを独立して「Ⅳ」として全体の提言とすることが1つの提案。

2番目は、先ほどのとおり「Ⅳ」で全体の提言を設けるならば、その前の「Ⅲ」は提案で4つ並べてもよいかとも思う。四つの課題に共通した19ページ「Ⅲ-5」をどう扱うかによって、課題ごとの「提案」を「提言」とするかどうか。

3番目だが、どういうことを我々は議論して、検討し、そして結論づけたのかということ、鳥瞰図を本委員会で話し合われたことの内容を県民に広く理解してもらうための広報図として、本編に入れることは大賛成である。

他の委員はどうか。

(新垣誠副委員長)

委員長の意見もいいのかと思うが、我々の提言書が今後どのように担保されて、特に県庁、市町村でどのように動いていくかとなると、「提案」では弱い気がする。そういう意味で、提言書の趣旨を広く理解してもらうために、ハッキリと提言と書いたほうがいいと思う。

また、追加の意見だが、提言となるともうちょっとわかりやすく、具体的にどういう提言なのかを、箇条書きにするなどの書き方が必要ではないかと感じている。例えば、市町村の施策にする際、県内に海外ネットワークの活動拠点を設置・定着させるための提言として文章が並んでいるが、具体的にもう少し簡潔に、箇条書きなどの記述もわかりやすい提言の一つかと感じた。

(小川委員長)

新垣誠委員の趣旨は、作成した鳥瞰図に近いかと思う。つまり、表や項目を表示して、それを目にした県民が更に内容を知りたいと思ったら、提言書の該当ページを読むという流れ。そのため、既に市町村に下ろしてもわかりやすい形にまとまっているのかと思うが。

(新垣誠副委員長)

そのとおりで、この表でかなりわかりやすいと思うが、例えば、ウチナーンチュ意識の見える化を促進してあるが、もう少し具体的な例でもいいので、どういう政策が可能なのか、全て具体的に書くことができないかと思う。

中にはかなり具体的なものがあり、例えば県庁内の窓口の設置は非常に具体的な提言

だが、情報継承アーカイブの強化とかなった場合にどういう内容かと。設置とかいうのは具体的だが、推進とか奨励とか促進とかは少し具体性に欠けるような表現かと感じる。

(小川委員長)

新垣誠委員が述べたように、15 ページの「ウチナーンチュ意識の見える化の促進」の項目には、2行しか文章が書かれていない。私が提案した項目でもあるので、こちらで追記する。

(新垣誠副委員長)

予算などに関連して、出来る事、出来ない事があると思うが、事務局とも相談しつつ現実的なところを書ければと思う。

(佐野委員)

これは、万国津梁会議の立ち位置に関係することだと思う。具体的に県庁がどうするのか、窓口を設置するとか、連携体制をどうするとか、具体的に動いてもらいたいと思う。動いて行かないと、議論してきたことの意味が無くなってしまう。

一方で、他の県の審議会などと違って、提言書に対して万国津梁会議の委員と県庁職員の意見交換の場があるものではない。提言が実現するかどうかの観点で、我々が実情を聞きながら提言を調整していくなどのプロセスが確保されない中で、どこまで具体的に細かく提言するかは少し悩ましいと感じた。

万国津梁会議の委員がそれぞれの経験・知見に基づいて提言するが、この提言はあくまでも知事に対して行うものであって、知事がその後、県庁の各部門に指示を出すなど、具体的な施策が考えられていく仕組みだとすると、あまり細かい内容で、その通りにフォローしなければいけないような提言の表現は難しいかと思う。その辺りを委員間でも議論して、提言の文言の使い方を整理していく必要があると思う。

私自身は最初、「Ⅲ」のタイトルが「提言」になるのであれば、4つの課題それぞれの提案も「提言」へ、全課題共通の提案も「提言」とする方がすっきりすると思ったが、例えば、「若者の沖縄の文化継承活動により多く参加し、世代間の連携を促進するために」と、あえて「提言」とか「提案」という言葉を入れない方法もあるのではないかと。

また、「Ⅲ-5」の全課題に共通する提言は4つの課題全体にかかる提言であり、Ⅲを

踏まえての最終的な万国津梁会議としての提言ではないと理解している。あくまでも個々の課題と並列で、対処法が個々の課題なのか全体なのかという違いだけである。その意味で、そのままⅢの中にある提言として位置付けられると思っている。

まずは、万国津梁会議の立ち位置、誰に対しての提言か、提言がどのようにフォローされていくのかについて、事務局からもう少し説明してもらい、理解を共通にしておきたい。

(東江二男 沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課主幹)

万国津梁会議の立ち位置だが、佐野委員の説明の通りである。今回の会議の提言、会議設置要綱は「意見」となるが、その意見を知事に、県庁という組織ではなくて知事に意見をす。知事の方がその意見を施策に反映させる・させないも含め、知事が施策を考える上で会議の意見を受け取る。

佐野委員から説明のあった県庁内部でどれぐらい政策にしていけるかという考えもあるが、一義的には知事が意見として聞くという過程がある。万国津梁会議のあり方としては、県庁ではなく、まず知事が会議の意見を聞く、そして、知事が施策への反映を検討・指示等していくという会議である。

(佐野委員)

そうであるなら、例えば、「連携の強化」、「推進する」、「促進する」など、あるべき状態を我々が意見として述べていくのがやはりよいかと思う。あるべき姿を我々が意見として述べることによって、具体的な施策を考える余地というか、行政のプロに任せる部分もあることが必要だと思うので、先ほど、促進するとか推進するという記述に少し曖昧さが残るのではないかという議論があったが、それはそれで意味があると思う。

(小川委員長)

19 ページの「Ⅲ－5」を格上げして「Ⅳ」にする提案を私の方でしたが、この文章は確か佐野委員が記述を担当した箇所であり、共通課題に関する提案である。委員の説明を聞き、内容もあらためて読んで確かにそうだと思うので、格上げを取り消し、元に戻す。

それから、14 ページのタイトル「検討考察」を「提言」に書き換え、中身の黒丸のそれぞれに提案とか提言を記載するのではなく、例えば「世代間の連携を促進するために」

でもよいかと思ってきた。提言、提案とかを全てに記述しなくても、タイトルが提言であれば、その下の四つの課題に対しては全て提言であるので、佐野委員の意見に賛同したいと思う。

促進・推進・奨励等々に関しては、それでもよいという大方の意見ではあるが、それも念頭に置きつつ、新垣誠委員、こういう表現もあるとか意見があれば。

(新垣誠副委員長)

すみません、三人の意見を聞き、そうとも感じている。「設置」という非常に具体的な提言がある中で、「推進」などの具体的な内容について自分が迷っていた部分があったので、バランスとして気になっていた。事務局から説明もあったように、知事が提言を見て、市町村へ対してなどではなく、まず知事の判断のための材料としての意見であればよいと自分も他の委員の意見を聞いて思った。

(小川委員長)

新垣秀彦委員の意見からここまで議論が膨らみ、良い形で収まったと思っている。ありがとうございます。

鳥瞰図も資料としてではなく本編に入れていく。佐野委員に伺うが、共通する課題が二つ挙げられているが、鳥瞰図にある線は4つの課題からそれぞれにタコ足のように伸びていった方がよいか。

(佐野委員)

はい、そこを指摘したいと思っていた。共通する課題は私が書いたが、前回の会議の議論をまとめたもので、少し肉付けして、二つに整理したものである。課題全体にかかるものと考えている。

例えば一つ目は、元々はビジネスの話から出た議論だったと思うので、課題1と課題2だけに線が引かれていると違和感がある。二つの共通課題が全体にかかるように、上手く図が描けるのであれば、紐付け自体はいらぬのではないか。

(小川委員長)

描き方については私で再検討させていただく。佐野委員、また意見いただきたい。

新垣旬子委員、気づいた点があれば何か。

(新垣旬子委員)

はい、私が意見したことは全部入っている。

(小川委員長)

良かったです。安里委員はどうか。

(安里委員)

私も意見は多く反映させてもらったので、最終的な文言などの修正は一任する。

(小川委員長)

全委員の想いがこの提言書に文章として詰まっていることを感じている。では最後の「おわりに」はこの内容でよいか。

(新垣誠副委員長)

文章最後の部分だが、もう少し分かりやすい言葉にする。佐野委員が全体に共通してまとめた部分と関連する記述があって、そこを受けつつ、連動する形の文言に直す。

(小川委員長)

では、「おわりに」に関しは、新たに加わった「Ⅲ－５」の全課題に共通する提言との連動も含め、追記・修正をお願いします。

また、「資料編」はただ資料を差し込むだけでなく、本文の文章の中で脚注として触れ、資料との連動性がわかりやすい記載にしてどうか。

(東江二男 沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課主幹)

例えば、1 ページの「2 (1)」の最後の行に、「資料編参照」という説明がある。他は2 ページの一番上の段落には「詳細は資料編参照」と記述。

(小川委員長)

「資料編を参照」のみの記述だと、どこのページに進めばよいか分からないので、例えば1ページ目の世界のウチナーネットワークに関するものは、脚注に「世界のウチナーンチュの日に関するイベント、例えば28ページ参照」という形でわかるようにすると、もう少し読み手には優しいと思う。

(東江二男 沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課主幹)

修正する。

(小川委員長)

略語一覧は、外国の資料や国連などの報告書では目次の次ページに挿入する。そのため43ページの略語一覧を、1ページの直前へ移動させる。

それから44ページから47ページまではアンケートに協力いただいたネットワークのURLだが、これも表にした方がよい。

(東江二男 沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課主幹)

修正する。

(小川委員長)

では、本日の議論はここまでとする。本日、委員の皆様から出された意見を取りまとめ、宿題として持ち帰るよう依頼のあった委員は引き続きお願いし、事務局から全委員に最終確認を行ってもらうので、引き続き対応をよろしく願います。

さて、今回のテーマでは、これが最後の議論となった。次回の会議からは別のテーマに移るということになる。これまで5回の会議を振り返って、委員一人ずつ3分程度、これまでの議論全体について感想をいただきたい。新垣誠委員から願います。

(新垣誠副委員長)

様々な立場の委員の皆さんの意見を伺うことが出来て非常に学びの場にもなったし、今まで自分が関わってきたネットワークについて色々なことを振り返りつつ、また新たな転換期を迎えているこういう場に関わらせていただき、非常に感謝している。

また、ポリビアの安里委員の話も聞き、WYUAの展開も見ることができ、今後の新

たなネットワークのあり方以上に、心躍る場所でもあった。感謝の気持ちだけしかない。ありがとうございました。

(佐野委員)

この会議に関われたことを光栄に思う。東京に来てから、沖縄は本土からどう見えるのか、どうしたら沖縄にいたときに普通に感じていた気持ちを県外の人たちにもシェアできるのかと思いながら、この会議に参加していた。今回の提言書を作成する時も、一部の沖縄ファンが盛り上がるというのではなく、沖縄を愛するみんながこれを読んで、「あ、そうだね」と思ってくれるようなものになるよう意識した。今後も別のテーマで議論が続くが、一つまとめることが出来て大変ほっとしている。

(安里委員)

まずは沖縄の反対のポリビアにしながら、こうしてオンラインで会議に参加できる環境に感謝したい。そして、議論に関しては、課題であった若者に対する活動、そして県内の活動拠点に関しては現場で関わってきていたが、今後のウチナーネットワークの有効活用などそれ以外のことについて貴重な意見交換ができたことが学びにもなった。今後活動していく上での物差しのようなものをもらう場になり、感謝している。

(新垣句子委員)

私は日頃はビジネスばかりなので、こういう場は初めてだが、とても勉強になった。一番感じたことは、県庁やその後ろで多くの人が色々なことなされていること。新聞だけ見てこういう事だと考え、生活しているだけで、県民の1人としても凄く勉強になった。その反対に、今回の提言がどのぐらいの人に見てもらえるかとも感じている。

もう1つは、やはり今回の提言の中に私の意見が入ったことに嬉しく思っている。毎日みんながいろいろなことをやっているのに、連携があればもっと大きい力になるだろうと思う。お陰様で、UCHINA1000のオンライン会議も参加した。また、ポリビアの「OKINAWA to 沖縄」でも沢山のことが見えた。ネットワークに参加したいというたくさんの方がいて、こういう力を寄せ合う沖縄がもっと大きくなっていくとよいなと思っている。また勉強していきたい。

(新垣秀彦委員)

今日は5回目で、特に私は行政OBとしていろいろと意見を述べてきた。かつて移民として海外へ赴いた人達は、現地で経済活動を行い、生活をする中で協力していき、横の連携をしながら、コミュニティを作っていった。そして今回、行政そのものが世界のウチナーネットワークの交流をどうしていくかという時に、東アジア経済戦略課が出席しているが、横の連携を含め、実行部隊として行政が今回の提言を受けてどう具体化していくか、出口を明確にほしいと願っている。

(小川委員長)

私自身、世界のウチナーンチュに関する事業なり活動なりに関わったのは本当に最近である。それは平成26年から私が現在所属する名桜大学の方で大学をあげてやんばるの移民(ディアスポラ)研究をしようという、その当時の学長の指揮の下、始まった。私自身の専門は公衆衛生学、国際保健だが、世界のウチナーンチュへのインタビューを通して、そのバイタリティー、ボランティアが高く、そのエネルギーはどこから来るだろうと徐々に引き込まれていった。その結果、私は今、公衆衛生学よりも、どちらかという移民研究に力を注ぐことが多くなった。

最初は、移民の中でもウチナーンチュを対象に研究をし始めたが、次第に他の国でウチナーンチュと共通する移民としてアイルランドに魅かれていった。2年前からは日本アイルランド協会に所属している。世界のウチナーンチュというキーワードで始まった私の移民に対する関心のネットワークが今でも広がりつつある。

第1回目から始まる会議の中で、それぞれのお立場で造詣の深い委員の皆さんの本当に忌憚ない意見をいただき、多くを学ばせてもらった。この委員会の特徴はジェンダーバランスにも表れている。6人のメンバーのうち女性が4人。女性が多いということも他の委員会には少なく、画期的だったと思う。多様な立場で専門性をもった各委員との意見交換が私にとって素晴らしい学びの場になった。感謝している。

では、次回、海外ネットワークに関する万国津梁会議として、知事へ直接提言書を手交するが、事務局の方から今後のことを含めて連絡をお願いする。

(前本博之 沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課長)

本日はどうもありがとうございます。委員長からもあったとおり、10月19日あたりを

目標にこの提言書を知事に手交したいと考えているが、この提言書は英語、スペイン語、ポルトガル語に翻訳して、世界のウチナーチュに向けて発信したいと考えている。

また、今回の提言書を趣向した後、知事がこの提言を受けて今後の県の政策にどう活かすか判断するので、我々行政でもしっかりと取り組んでいきたいと考えている。

海外ネットワークに関する万国津梁会議は本日で終了だが、知事からもう一つのテーマ、「コロナ渦における世界のウチナーチュ大会」について議論してほしいというオーダーがあるので、恐縮だが、引き続きご協力をいただきたい。

それに向けて、第七回の世界のウチナーンチュ大会の概要の方を、ウチナーンチュ大会の事務局から説明する。

(宮城清美 沖縄県文化観光スポーツ部 第7回ウチナーンチュ大会事務局室長)

第7回世界の世界のウチナーンチュ大会の概要（参考資料）を説明

(小川委員長)

第七回世界の世界のウチナーンチュ大会の概要説明を聞きながら、これまで五回、私達が議論したものと重ね合わせ、感じたことがある。

一つはウチナーンチュ大会というのがなかなか県民に浸透していない。つまり県民が新聞を通じてわかるのだが、どうやって大会に参加するか。もっと県民を巻き込むような形で展開できないものか。今回はオンラインでのハイブリッドも考えられている。オンラインだからこそ、同じ場の居なくても、いろんな人が視聴できるような参加が可能な形に是非とも変えていただきたい。それが今回の私達の課題の一つとして出された、沖縄のアイデンティティーの低下、若者の参加傾向の減少ということを少しでも払拭できる大会になるのではないか、チャレンジしてほしい。

そして、海外のウチナーンチュだけでなく、沖縄にいるウチナーンチュ、県外にいるウチナーンチュも意識して巻き込むような形で情報発信をしてくれるとありがたい。

もう一点は、五年に一度のイベントなので、沖縄という地に結集するというのが今までの流れだと思うが、私達の会議の中では、沖縄というネットワークの中心があつてそこから放射線状に繋がりがあるものから一歩先を行って、ネットワークという言い方をしているが、全世界にいろいろな興味関心のあるウチナーンチュが点在しており、その人達を繋ぐのは沖縄という一つの場所だけではなく、それぞれの地域にある県人会、空手の愛好

会など、その人達が沖縄という中心に向かわなくても、その人達のアイデンティティや活動の場を中心としてネットワークがつながる。そのようなイメージをウチナーンチュ大会で考えてみるのはどうか。

また、ウチナーンチュ大会に来ることができない人、例えば南米ボリビアのウチナーンチュがボリビアでは世界のウチナーンチュ大会をこんな形で盛り上げているよと中継を見ることができるようなブースがあったら、それを県民に公開するとか、チャンネルを作るとか、一ヶ所でのスタジアムでのイベントだけでなく、それぞれのイベントがオンライン上で皆が見ることができる、オリンピックのようなイメージで考えていくと、オンラインでやるアドバンテージがあると思う。五回にわたって私たちが語ってきたことを少しフィードバックさせていただいた。

(前本博之 沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課長)

次回テーマについての進め方や会議日程などは、今後、小川委員長はじめ各委員に事前に相談した上で進めていく。以上をもって、海外ネットワークに関する万国津梁会議を終了します。